



国際教育総合文化研究所

寺島隆吉 Terashima Takayoshi

「マケレレ五原則」で疲弊する教育現場

英語教育を旧植民地＝新興独立国家における最重要課題とする会議が、1961年にウガンダのマケレレで開催されました。それは、「第二言語としての英語教育」を主題とする英國連邦会議で、その報告書では次の5項目が信条として述べられています。

- 1) 英語は英語で教えるのがもっともよい
- 2) 理想的な英語教師は英語を母語とする話者である
- 3) 英語学習は早いにこしたことはない
- 4) 英語に接する時間は長いにこしたことはない
- 5) 英語以外の言語の使用は英語の水準を低下させる

このいわゆる「マケレレ五原則」と呼ばれる信条は、独立国となった新興諸国を英國が引き続き属国として支配するための道具として英語をどのように利用するかを念頭においたものでしたから、科学的根拠の乏しいものでした。

ところが今やこの原則が世界各国の英語教育に深刻な悪影響をおよぼすことになってしまいました。日本も例外ではなく、最近は学習指導要領にまで明記されることになり、現場の疲弊と混乱を強め、それが生徒の学力低下の一因にまでなっています。

ところで、この「原則」はロバート・フィリップソン『言語帝国主義—英語支配と英語教育』（三元社）で完膚なきまでに批判・分析されています。大部かつ高価というのが難点ですが、英語教師なら一度は読んでいただきたい本です。ただし、一気にすべてを読む必要はなく、当面はマケレレ原則について詳述した第7章だけを読み、徐々に他の章にも手を伸ばせばよいのではないかでしょうか。

あるいは代わりに『小田実の英語50歩100歩』（河合文化教育研究所）を読むという方法もあります。有名な作家・小田実が、予備校講師として、また平和運動家として、「帝国の言語」とどうつきあってきたかを大阪弁で語ってくれる、実に痛快な本です。ただし中古品でしか手に入らないのが難点かもしれません。